移住者日記

No.14



夜の森硝子
（YONOMORI　GLASS）　　**齋藤　柚季乃（ゆきの）　様**

移住前は東京で暮らしていました。東日本大震災が起きた当時は仙台に住んでおり、中学 3 年生でした。震災のことは実体験として覚えていますが、その後は就職を機に東京へ行き、仕事を続ける中で、震災や原発事故について思い出す機会は次第に少なくなり、被災地がその後どうなっているのかもあまり知らないまま過ごしていました。

富岡町を知ったのは、移住先を探していたときのことです。偶然見つけた「夜の森」という地名に惹かれたのがきっかけでした。最初は「ヨルノモリ」と読んでいて、オオカミが遠吠えするような森に囲まれた場所を想像していました。実際に訪れてみると、家がなくなり塀だけが残っている場所もあり、その風景はまるで城跡のようにも見え、長い年月を感じさせました。十数年にわたり人が立ち入らなかったことで生まれた景色があることに驚くとともに、この地域ならではの時間の流れを感じました。

富岡町への移住を考えてから、決断までは 4 か月でした。移住体験ができるお試し住宅を利用し、自分や夫の両親にも町を見てもらいました。「移住先を決定するのが早すぎるのではないか」と言われることもありましたが、住んでみなければ分からないことも多いので、生活してみてもし合わなければ、また移住すればいい、そう考えて、一歩を踏み出しました。

放射線については、移住前から大きな不安を感じていたわけではありませんでした。実際に住んでいる人がいることも知っていたため、「生活しながら学んでいこう」と考えていました。暮らし始めてから放射線について調べる中で、放射性セシウムが土に吸着しやすい性質を持つことなど、初めて知ることもありました。放射線は目に見えませんが、測ることができます。町役場から測定器を借りて、工房や自宅の周りを自分で測ったこともあります。分からないまま不安を抱えるのではなく、自分で調べ、確かめながら暮らしています。

実際に暮らしてみて意外だったのは、震災からの復興が進む中で、生活に必要な環境が思っていた以上に整っていたことです。スーパーのほかに、飲食店や居酒屋など、人がいるからこそ成り立つお店もあり、生活に不自由を感じることはありません。

現在は、ガラスや陶器を使った作品を制作し、アトリエと店舗を構えています。限られた材料から自分が納得できる形をつくり、それを誰かに「いいな」と思ってもらえることに魅力を感じています。

また、作品を作るだけでなく、作品を通して、町を見る人の「見方」が少し変わるようなものを届けたいとも考えています。例えば、「怪獣」という作品ですが、まずは「かわいい」と思って手に取ってもらい、その後で「草木が生い茂る夜の森に住んでいる」という作品の背景を知ってもらう。そして、また夜の森に訪れた際に、寂しさを感じるのではなく、「ここにも怪獣がいるかもしれない」と想像してもらえたら嬉しいです。そんなふうに、風景を見る視点を一つ増やすきっかけになればと考えています。

のんびりとした田舎暮らしを思い描いて移住しましたが、思っていた以上にアクティブな人が多いことは意外でした。それでも、今の富岡町での暮らしは合っていると感じています。これからも富岡町での暮らしを楽しみながら、自分なりの表現を続けていきたいと思っています。